

合わせて、13作品を視聴し、高校生ならではの視点、感じていること、普段の生活での違和感、身近なことを知ってみたいという気持ち、様々なことを感じさせていただきました。どの作品も等身大で、皆さんのみずみずしい感性が生かされていたと思います。

今回、高校生の放送コンテストの審査員を初めて務めさせていただき、放送とは何なのか、映像で伝えることとは何なのか、改めて原点を教えて頂いたように思います。以下、特に印象に残ったものについて、お伝えします。

学校生活の違和感について、テーマにしたものが多くありました。菊里の KTC(簡素端正コレクション)、岡崎西「腰を下ろして休めない!」、同朋「ペンよりメイク」などです。放送において、「何かを伝えたい」と考えた時に、身近なテーマから紐解いていく、ということは、とても重要なことだと思います。個人で考えていること、感じていることは、それがうまく言語化できなくても、実は根深い問題を抱えていることが多いからです。しかし、大人になっていくと、身近に感じる違和感は、「それって社会では普通だよな…」と、段々と忘れられてしまう…。だからこそ、まだ高校生の皆さんが校則や昔からの習慣について、疑問を持つことが大事なのです。ただ、そうしたテーマや伝えたいことを、見る人に納得感を持って感じてもらう、ということはとても、難しいこと。その観点でいうと、名古屋大谷の「ないモノねだり」は、指導票への疑問を切り口に、昔の高校生との対比、登下校の際の先生側と生徒側との認識の違いなど、「ハー」と膝を打つシーンが多くありました。今後ぜひ、こうした「見せ方」に工夫を凝らしていったほしいと思います。

その他、学校外の人物や団体に取材し、その活動や意義を伝えるというテーマのものも多くありました。名城大付属「知る、演じる、伝える」、愛知淑徳高校「かけつぎ 掛け継ぐ」、愛知工業大学名電「ものづくりの源〜魂有り〜」などです。中でも、刈谷「風街紀行 124 通の手紙」は、戦争で父を失った娘さんが、父への思いを絵本にしたことを起点に、「戦争は絶対におこしてはいけない」という普遍的なテーマを静かに伝える内容でした。遺書については、この取材を通じて、娘さんも初めて読んでみた、とのこと。取材をきっかけに、取材相手が自身に起こったことを整理し、インタビューを通じて言語化していく、そして、その聞き手になる、ということは、制作者としての醍醐味でもあると思います。制作者の皆さんは80年も前の戦争について、自身の言葉で質問をし、得た証言を元に構成していく、というかけがえのない経験をされたのではないのでしょうか。ただ、内容は素晴らしかったのですが、インタビューの音が少し割れているように感じられたのが残念でした。貴重な証言をしていただいた方に対し、失礼なことがないように、技術的なクオリティーをしっかりと高める、ということもとても大事なことでと思います。次回の制作においては、そうした観点にも気を付けて頂ければと思います。

最後に、映像を視聴者に届ける、という行為は究極的にどうということなのでしょうか？私は、映像を見ることで、その映像に描かれきれなかった背景や人物の思いに心を馳せてみる、ということに他ならないと思っています。その点でいうと、どの作品も視聴後に心地よい余韻が残り、テーマや人物の気持ちをもっと知ってみたい！と思うものばかりでした。ありがとうございました。